恋人間暴力に対する１次予防プログラムに関する探索的検討
―ネガティブな相互作用における対処行動の行使可能性に着目して[1]

The situation used for primary prevention of dating violence:
Exploratory studies focused on the possibility of coping behavior

古　村　健太郎*、相　馬　敏　彦**
山　中　多民子***、杉　山　詔　二****

Kentaro KOMURA, Toshihiko SOUMA, Tamiko YAMANAKA and Shoji SUGIYAMA

要　旨

恋人間暴力の加害と被害のどちらも、思春期や成人初期の若者の心身の健康や発達、社会適応に対するリスク因子となりうる。そのため、早期から恋人間暴力を予防するための実践が必要性である。近年では、恋人間暴力を未然に防ぐことを目的とした１次予防が盛んに行われている。しかし、恋人間暴力の１次予防には、プログラムに参加する人々の動機づけを高める工夫が必要などの問題がある。このような背景を踏まえ、本研究は、恋人間暴力に対する１次予防のプログラムで使用するための、恋人間の否定的相互作用を描いた場面を作成し、その場面における対処行動の行使可能性を検討した。この際、否定的相互作用の特徴と対処行動の行使可能性との関連についても検討した。その結果、主張的行動や攻撃行動の行使可能性は、別れの理由になる可能性が高いことや二者が対等ではないことといった場面の特徴と関連した。一方、受忍行動の行使可能性は、別れの理由になる可能性が低く、二者が対等であると感じるような場面の特徴と関連した。これらの結果から、恋人間暴力に対する１次予防で用いる否定的相互作用の場面の用い方について考察した。

キーワード：恋人間暴力、１次予防、対処行動

問題と目的

青年期や成人初期において、健康的な恋愛関係を形成し維持することは、当事者の社会性の発達や社会適応に良い影響を与える（Collins, Welsh & Furman, 2009）。しかし、その一方で、恋愛関係が社会適応を阻害する場合もある。その一つとして、恋人間暴力（dating violence；以下、DaVとする）が挙げられる。これまでの様々な調査から、恋人間の暴力被害や加害を経験したことのある若年層が、少なからず存在することが明らかになっている（e.g., 日本性教育協会、2019）。若年層のDaV被害と加害はどちらも、抑うつの発症と悪化、睡眠障害、過度なアルコール摂取など心身の不健康の原因となることが知

*　弘前大学人文社会科学部　Faculty of Humanity and Social Sciences, Hirosaki University
**　広島大学大学院社会科学研究科　Graduate School of Social Sciences, Hiroshima University
***　武蔵野大学心理臨床センター　Clinical Psychology Center, Musashino University
****　東京都立松沢病院　Tokyo Metropolitan Matsuzawa Hospital

1　本研究は、日工組社会安全財団の研究助成（2018年度一般研究助成、代表者：相馬敏彦）を受けて行われたものである。また、本研究は、相馬・杉山・古村・山中・伊藤（2020）の一部を再分析・再構成したものである。

られている（e.g., Beydoun, Beydoun, Kaufman, & Zonderman, 2012, Exner-Cortenr, Eckenrode, & Rothman, 2012）。そのため、DaVは加害であれ被害であれ、思春期や成人初期の若者の心身の健康や発達、社会適応に対するリスク因子となるものであり、早期からの予防が望まれる。

DaVの予防にとって重要な視点の一つは、恋人間の否定的な相互作用の激化によって生じる暴力を防ぐことである。DaVの被害や加害は、必ずしも交際の初期から生じるものではなく、また、必ずしもあるとき突然生じるものでもない[2]。恋人間で生じた葛藤をきっかけに否定的な相互作用が暴力へと発展してしまう場合もあれば、恋人からの過激な冗談をポジティブに捉えているうちに、その過激な冗談が慢性化し、心理的暴力へと発展してしまう場合もある。例えば、Arriaga（2002）は、恋人との関係が良好な場合、恋人からの暴力が冗談の文脈と関連付けられて解釈されやすいことを明らかにしている。O'Leary & Slap（2003）やSalis, Salwen, & O'Leary（2014）は、恋人からの心理的暴力の加害や被害が、後の身体的暴力へと結びつくことを明らかにした。

恋人間の否定的な相互作用や過激な冗談などを発端とするDaVを予防するためには、その行為に対していかに対応するかが重要となる。相馬・浦（2010）は、恋愛関係や夫婦関係を対象とした研究により、恋人や配偶者の否定的な言動に対して、反論するなどの自己主張をすることが、心理的暴力の激化を抑制することを明らかにした。しかし同時に、相馬・浦（2010）は、恋人や配偶者が特別でかけがえのない存在であると感じるほど、相手の否定的な言動に対して自己主張ができなくなり、DaVの被害を受けやすくなってしまうことも明らかした。これらの実証的研究の結果から、特別だと思えるような良好な関係であっても、暴力へと激化する可能性のある相互作用を見逃さず、その相互作用に対し自己主張をすることが、DaVの予防にとって重要と考えられる。

若年層のDaVに対して、被害や加害の早期発見と早期解決を目指す2次予防や、被害者保護や加害者の再教育を中心とする3次予防など、これまで様々な対策が行われてきた。しかし、2次予防も3次予防も、すでにDaVが生じている人々を対象としており、DaVを未然に防ぐという点において限界がある。そのため、DaVを未然に防ぐことを目的に、広範囲の人々に対して行われる1次予防も盛んに行われている。例えば、Foshee, Reyes, Agnew-Brune, Simon, Vagi, Lee & Suchindran（2014）は、学校ベースで行われるDaV予防プログラムであるSafe Datesについて、ランダム化比較試験による効果検証を行った。その結果、Safe Datesが1年後のDaVの抑制に効果を持つだけでなく、友人関係における暴力加害や被害の抑制にも効果を持つことが明らかにされた。また、Levesque, Johnson, Carol, Prochaska, & Piva（2016）は、3セッションから構成されるオンライン予防プログラムであるTeen Choiceの効果検証を行った。その結果、Teen Choiceは、DaV被害の抑制に効果を持つことが明らかにされた。

我が国においても、DaVの1次予防を目指した実践が行われている。例えば、須賀（2015）は、中学生を対象としたDaV予防プログラムを考案し、その効果検証を行った。プログラムは全15セッションで構成されており、中学生が直面しうる場面やストーリーを用いて、DaVの特徴や他者の尊重を理解していく内容となっていた。効果検証の結果、DaVについての知識は、プログラム実施直後に増加するものの、1ヶ月後に元の水準へと戻ってしまうことが示された。しかし同時に、プログラム実施によって、受講生はDaVに対して関心を持ったり、プログラムが自分に良い影響を与えていると感じるようになったりすることも示された。また、相馬・杉山・山中・門馬・伊藤（2016）は、大学生を対象としたDaV予防プログラムを考案し、その効果検証を行った。このプログラムは、DaVに対する予防行動の生起を促すセッションと、DaVの被害リスクや加害リスクを低減できる社会環境を作るための第3者としての振る舞いを考えるセッションから構成された。効果検証の結果、プログラムの受講によって、恋人以外

[2] ただし、交際の初期から恋人を支配し、コントロールする場合も存在する。そのような暴力と、恋人間の否定的な相互作用が激化して生じる暴力は、質的に異なるものであることが指摘されている（Johnson, 2008）。本稿では、否定的な相互作用が激化して生じる暴力について議論していく。

の友人との関係維持行動や第3者としてDaVを予防できるという効力感が高まることが明らかにされた。以上のように、我が国でもDaVの1次予防を目指した実践が数多く行われ、その成果が蓄積されてきている。

DaVに対する1次予防の実践は、第3次男女共同参画基本計画や第4次男女共同参画基本計画における「暴力を伴わない人間関係を構築する観点からの若年層を対象とする予防啓発の拡充、教育・学習の充実を図る」という指針と軌を一にするものである。しかし、九州・沖縄地区の学校におけるDaV予防教育の実態を調査した喜多・坂井（2015）では、大学での予防教育の実施状況が5割に満たないことが明らかにされた。また、その理由として、学内組織の役割分担が不十分であることや、リーフレットなどの配布で十分であることが挙げられやすいことも明らかにされた。喜多・坂井（2015）は九州地区での調査であるが、大学においてDaVの予防を実践するためには、その実施体制や実施方法を整える必要性を示唆している。このような状況において、コミュニケーションや社会的スキルなど対人関係における能力を育む役割も担う大学の教養教育は大きな役割を果たすであろう。また、教養教育は、専門が異なる様々な学生が受講する。そのため、DaVの一次予防を教養教育の中に位置づけていくことは、実施体制や実施方法を整えながら、幅広い学生を対象にするための有効な手段の一つとなりえる。

しかし、DaVに対する1次予防を実施するにあたり、様々な問題点が散見されており、その対策を講じることが望まれる。例えば、須賀（2015）は、学校教員を対象とした調査を行い、DaVに対する予防教育の重要性や必要性を多くの教員が感じているものの、その実践の難しさも感じていることを指摘している。そのため、予防教育をパッケージ化し、小学校から高校での教育など様々な場面で利用可能性を高めることが求められている。また、1次予防は、恋人がいる人だけではなく、恋人がいない人や恋人が欲しくない人など幅広い人々を対象としている。多くの人々が対象となった場合、恋人がいる受講生など受講生の一部にとっては身近な問題として扱われるのに対し、恋愛に興味がない人や恋人が欲しくない人など受講生の一部にとっては他人事と感じられてしまう可能性がある。このような関心の高さの違いによって、受講生の動機づけに差が生じ、グループワークなどの取り組みがうまくいかないおそれがある。したがって、プログラムの中で、多くの受講生がDaVを身近な問題と感じ、受講の動機づけが高くなるような手立てが必要になるであろう。

受講生の予防プログラムへの動機づけを高める手立ての一つとして、プログラムで提示する場面の設定が考えられる。上述した須賀（2015）においても相馬他（2016）においても、DaVが生じている場面、あるいは、DaVへと激化する可能性のある相互作用の場面を提示し、それをもとにプログラムが展開されている。したがって、幅広い人々を対象とするDaVに対する1次予防プログラムでは、いかに受講生が想起しやすく、かつ、DaVについて深く考えられるような場面を提示するかが、プログラムを進行する上で重要になるとであろう。しかし、どのような場面設定を行うことが適切かについての検討は、十分になされていない。

そこで、本研究は、DaVに対する1次予防プログラムで使用できる場面を複数作成し、それらの場面について検討することを目的とする。この際、提示した場面における対処行動の行使可能性と関連する要因を検討していく。その理由は、先述したように、DaVの予防には暴力へと激化する可能性のある相互作用を見逃さず、その相互作用に対し自己主張をする必要性があるためである。自己主張を取りにくい場面を提示し、そこでどのような行動を取るべきかを考えることは、プログラムの効果を高めると考えられる。したがって、提示する場面における対処行動の行使可能性を検討することは、プログラムの場面設定における有用な情報を提供しうるであろう。

本研究では、場面の行使可能性と関連する要因として、以下の2点を取り上げる。第1に、提示する場面の特徴を取り上げる。場面の特徴としては、生起可能性、イメージしやすさ、二者の対等さ、別れになる可能性を取り上げる。これらの特徴と対処行動の行使可能性の関連を検討することは、どのような特徴に考慮して場面を設定することがプログラムの目的と合致するのかの情報を提供する可能性があ

り、予防プログラムにおける場面設定に有用な情報を提供できると考えられる。

第2に、個人特性との関連を検討する。1次予防は幅広い人々を対象とするため、受講生のパーソナリティや考え方の個人差は大きくなりやすい。特に、対処行動の行使可能性に対する個人差の影響は、プログラムの効果を高める上で、考慮すべき重要な要因となるであろう。そこで本研究は、提示された場面での対処行動の行使可能性と個人差変数の関連を検討することとする。個人差変数としては、パーソナリティ（外向性と神経症傾向）、恋愛とはどのようなものかというイメージ（独占・束縛イメージと献身イメージ）を用いる。

方法

予備調査

2018年12月から2019年2月にかけて、DaVへと発展する可能性のあるネガティブな相互作用を収集するため、大学生168名（男性77名、女性85名、未回答6名、平均年齢21.42歳、SD＝7.57）を対象とした質問紙調査を行った。調査では、「以下の三つの場面それぞれについて、あなたが体験したことや見聞きしたことがあれば、できるだけ具体的にその状況を教えてください」と教示し、各場面についての記述を求めた。提示した場面は、「交際相手との普段のやり取りの中で、交際相手に強い怒りを感じ、相手を傷つけたくなった（もしくは傷つけた）場面」、「交際相手から理不尽なことをされたけれども、我慢したり何もできなかった場面」、「交際相手からされたことで、嫌な気分になった場面」であり、体験したことや見聞きしたことを思いつくだけ記述するよう求めた。

その結果、相手から束縛されるような出来事（友達と遊びに行くのも制限され、遊んだ日には怒られる等）、相手との不平等を感じた出来事（自分はするのに、私に対してその行動等を禁止する等）、過激な冗談や悪意のある冗談を言われた出来事（自分の出身地や友達を馬鹿にすることを言われた等）、約束を破られた出来事、しつこいコミュニケーション、価値観・ルールの押しつけや価値観の相違（交際相手の家族間のルールを押し付けられた等）、浮気などの出来事が収集された[3]。

これらの結果を踏まえ、DV予防プログラムで用いることができる場面について著者間で協議を重ね、5つの場面を作成した（Table 1）。

調査参加者

株式会社クロス・マーケティングが保有するインターネット・サンプルより、未婚であることと子どもがいないこと、18―25歳であることを条件に抽出した学生と社会人382名が回答した。その中から、フィラー項目（この項目は4を選んでください）に誤回答をした81名、スクリーニング調査と本調査で恋人の有無が一致しなかった10名、子どもがいると回答した1名、結婚したことがあると答えた1名を分析から除外した。最終的な分析対象は288名（男性83名、女性205名）であった（平均年齢21.68歳、SD＝2.25、恋人がいる人は112名）。

---

[3] 予備調査では、少数ではあるものの「性交時に首を締められた」や「外でセックスすることを求められた」などの性行為の強要や、「お金を返してくれない」など経済的暴力についての記述があった。これらの暴力は重大な暴力であるものの、予備調査はDaVへと発展する可能性のある相互作用を収集することを目的としたため、性行為の強要や経済的暴力に関する場面は作成しなかった。

Table 1　各場面の評価の記述統計

場面1：不機嫌場面 Aさんは、あなたの些細な言動で機嫌が悪くなってしまいます。そのような状況になると、Aさんはあなたが話しかけてもそっけない態度を取ったり、無視したりします。
場面2：飲み会場面 Aさんがあなたに内緒で、異性のいる飲み会に行っていたことが後でわかりました。Aさんはそのことについて何も言ってきません。
場面3：理不尽場面 あなたはAさんの言動が理不尽だと感じることや、してほしくないと感じることがあります。あなたは、それらの言動をやめてほしいと伝えますが、Aさんはやめる素振りを見せません。
場面4：人付き合い限定場面 人との付き合い方について、Aさんはあなたに口出ししてくるのに、あなたから口出しされるのは嫌がります。
場面5：異性付き合い限定場面 Aさんは、あなたに「他の人と遊びすぎ」「異性と話しているのが心配」などと言い、人付き合いの範囲を狭くしようとしてきます。

測定尺度

以下の項目について回答を求めた。

（1）各場面の評価：予備調査によって作成した5つの場面（Table 1）を提示し、各場面について生起可能性（1項目、4件法）、イメージしやすさ（1項目、4件法）、二者の対等さ（1項目、4件法）、別れの理由になる可能性（1項目、4件法）への回答を求めた。

（2）各場面における対処行動の行使可能性：相馬（2016）やRusbult, Verette, Whitney, Slovik, & Lipkus（1991）を参考にし、相手に対し自分の考えや意見を明確に伝えることを意味する主張行動（不愉快だとはっきり伝える、そのことについて相手と議論する、相手の非を見逃さず、指摘する）、積極的な対処をせず我慢をすることを意味する受忍行動（何もせずに我慢する、相手の顔色をうかがう、相手を許す）、問題を直接的に解決せず、直接的に問題とは関係ないことで相手を攻撃することを意味する攻撃行動（例：大声で相手を怒鳴る、相手の人格を責める、相手を無視する）を3項目ずつ作成し、各場面について5件法で回答を求めた。

（3）個人特性：個人特性として、外向性と神経症傾向（並川・谷・脇田・熊谷・中根・野口，2012；各5項目5件法）、恋愛に対するイメージ尺度（金政, 2002）から独占・束縛イメージと献身的イメージ（各3項目、5件法）への回答を求めた。

結果

記述統計量

葛藤場面における対処行動の行使可能性について、場面ごとに確認的因子分析を行った。その結果、適合度はCFA = .90 ―.96、RMSEA = .08 ―.11、SRMR=.06 ―.08であり、各場面で概ね許容範囲の値を示した。また、内的一貫性を確認するためω係数を算出した。その結果、主張行動はω=.83 ―.90、受忍行動はω=.63 ―.72、攻撃行動はω=.71 ―.86であり、いずれの行動の行使可能性も十分な内的一貫性が確認された。そこで、各行動の平均値を算出し、各尺度得点とした。いずれも得点が高いほど、その対処行動を行使する可能性が高いと考えていることを意味する。

5つの場面ごとの生起可能性、想起しやすさ、二者の対等さ、別れの理由、対処行動の行使可能性の記述統計量をTable 2に示す[4]。

Table 2　各場面の評価の記述統計

	場面1	場面2	場面3	場面4	場面5	*ICC*	*DF*
生起可能性	2.59	2.78	2.58	2.67	2.74	0.01	1.02
想起しやすさ	3.06	3.24	2.90	2.97	3.10	0.01	1.06
二者の対等さ	2.30	2.65	1.97	1.83	2.20	0.11	1.45
別れになる可能性	2.90	2.66	3.32	3.24	2.94	0.08	1.32
主張行動の行使可能性	3.25	3.05	3.95	3.85	3.35	0.10	1.40
受忍行動の行使可能性	3.37	2.96	2.59	2.51	2.77	0.12	1.47
攻撃行動の行使可能性	1.87	1.79	2.03	1.97	1.80	0.01	1.03

注）場面1＝不機嫌場面，場面2＝飲み会場面，場面3＝理不尽場面，場面4＝人付き合い制限場面，
場面5＝異性付き合い制限場面，*ICC*＝級内相関係数，*DF*＝デザインエフェクト。

個人特性を測定する尺度についても内的一貫性を算出した。その結果、外向性や神経症傾向、恋愛への独占・束縛イメージ、献身的イメージは$\omega > .81$であり、十分な内的一貫性が確認された（Table 3）。そこで、先行研究に倣い、該当する項目の平均値を算出し、各尺度の得点とした。各個人特性の記述統計量をTable 3に示す。

Table 3　個人差変数の記述統計

	ω	*Mean*	*SD*
パーソナリティ			
外向性	0.89	3.85	0.97
神経症傾向	0.87	2.95	1.01
恋愛のイメージ			
独占・束縛	0.85	4.14	1.44
献身	0.81	4.32	1.31

対処行動の行使可能性に影響を与える要因の検討

分析の方針　本研究で収集したデータは、各場面の評価（レベル1）が個人（レベル2）にネストされている階層的データである。階層的データを扱う際、変数の級内相関係数が0.10以上である場合やデザインエフェクトが2以上である場合は、階層線形モデルなど階層的データの性質を考慮した分析を行うことが推奨されている（清水、2014）。しかし、本研究で扱う変数は、級内相関係数が0.10を下回るものが多く、また全ての変数でデザインエフェクトが2を下回っていた（Table 2）。一方、Huang（2018）は、扱うデータが階層的データである場合には、級内相関係数やデザインエフェクトが低くてもType Iエラーが生じる危険性があるため、これらの値に関わらず、階層的データの性質を考慮した分析を行うことを推奨している。

そこで本研究は、Huang（2018）にしたがい、階層線形モデルを用いた分析を行った。具体的には、各対処行動の行使可能性（主張的行動、受忍行動、攻撃行動）を目的変数とし、第1レベルの説明変数として全ての場面で共通して測定した場面の評価（生起可能性、想起しやすさ、二者の対等さ、別れの理由になる可能性）、第2レベルの説明変数として個人差変数（外向性や神経症傾向、恋愛への独占・束縛イメージ、献身的イメージ）を投入した階層線形モデルによる分析を行った。場面の評価の各変数

4　5つの場面間の平均値の差については、相馬他（2020）を参照されたい。

は集団平均による中心化を行った。また、レベル2の説明変数として、ダミーコード化した性別（1＝男性、0＝女性）と恋人の有無（1＝あり、0＝なし）も投入し、その影響を統制した。

最終的なモデルの決定は、ランダム切片モデル（切片は場面によって異なるが、傾きは場面間で等しいと仮定するモデル)、ランダム傾きモデル（切片は場面間で等しいが、傾きは場面によって異なると仮定するモデル)、ランダム切片・ランダム傾きモデル（切片も傾きも場面によって異なると仮定するモデル）をBICによって比較し、BICが最も小さなモデルを採択する。

以下では、階層線形モデルの結果を目的変数ごとに記す。

主張的行動　ランダム切片モデルはBIC＝4164.8、ランダム傾きモデルはBIC＝4345.5、ランダム切片・ランダム傾きモデルはBIC＝4227.6であり、ランダム切片モデルが採択された（Table 4)。

場面の特徴に注目すると、主張的行動の行使可能性は、場面の想起しやすさや別れの理由になる可能性と正の関連を示し、二者の対等さと負の関連を示した。一方、個人差に注目すると、主張的行動の行使可能性は、外向性や恋愛の独占・束縛イメージ、恋人がいること、女性であることと正の関連を示し、神経症傾向と負の関連を示した。

受忍行動　ランダム切片モデルはBIC＝370.4、ランダム傾きモデルはBIC＝3981.3、ランダム切片・ランダム傾きモデルはBIC＝3857.6であり、ランダム切片モデルが採択された（Table 5)。

場面の特徴に注目すると、受忍行動の行使可能性は二者の対等さと正の関連を示し、別れの理由になる可能性と負の関連を示した。一方、個人差に注目すると、受忍行動の行使可能性は、神経症傾向や男性であることと正の関連を示した。

攻撃行動　ランダム切片モデルはBIC＝4164.8、ランダム傾きモデルはBIC＝4354.5、ランダム切片・ランダム傾きモデルはBIC＝4227.6であり、ランダム切片モデルが採択された（Table 5)。

場面の特徴に注目すると、攻撃行動の行使可能性は、生起可能性や別れの理由になる可能性と正の関連を示し、場面の想起しやすさや二者の対等さと負の関連を示した。一方、個人差に注目すると、攻撃行動の行使可能性は、恋愛の独占・束縛イメージと正の関連を示し、恋愛の献身的イメージや恋人がいることと負の関連を示した。

Table 4
主張的行動を目的変数にした階層線形モデルの結果

目的変数	主張的行動の行使可能性				
	b	*SE*	95%CI		*p*
説明変数			LL	UL	
固定効果					
切片	3.26	0.22	2.78	3.70	.00
生起可能性	-0.07	0.04	-0.14	0.01	.07
想起しやすさ	0.09	0.03	0.02	0.16	.01
二者の対等さ	-0.27	0.03	-0.33	-0.20	.00
別れの理由になる可能性	0.39	0.03	0.32	0.45	.00
神経症傾向	-0.13	0.03	-0.19	-0.07	.00
外向性	0.11	0.03	0.05	0.16	.00
独占・束縛	0.08	0.02	0.03	0.12	.00
献身	0.02	0.02	-0.03	0.07	.40
恋人の有無	0.25	0.06	0.13	0.38	.00
性別	-0.26	0.06	-0.39	-0.14	.00
ランダム効果	分散				
切片	0.12				
残差	0.99				

Table 5
受忍行動を目的変数にした階層線形モデルの結果

目的変数	受忍行動の行使可能性				
	b	*SE*	95%CI		*p*
説明変数			LL	UL	
固定効果					
切片	1.74	0.19	1.34	2.15	.00
生起可能性	0.05	0.03	-0.02	0.11	.14
想起しやすさ	0.00	0.03	-0.06	0.05	.90
二者の対等さ	0.16	0.03	0.10	0.22	.00
別れの理由になる可能性	-0.13	0.03	-0.18	-0.07	.00
神経症傾向	0.23	0.03	0.17	0.28	.00
外向性	0.00	0.02	-0.05	0.04	.84
独占・束縛	0.01	0.02	-0.02	0.05	.51
献身	0.02	0.02	-0.02	0.06	.26
恋人の有無	0.00	0.05	-0.10	0.11	.94
性別	0.29	0.05	0.18	0.40	.00
ランダム効果	分散				
切片	0.09				
残差	0.74				

考察

本研究の目的は、DaVに対する1次予防プログラムで使用できる場面を複数作成し、それらの場面における対処行動の行使可能性と関連する要因を検討することであった。以下では、対処行動ごとに結果の概略を述べ、考察していく。

主張的行動の行使可能性は、その場面を想起しやすいこと、別れの理由になる可能性が高いと感じること、二者が対等ではないと感じることによって高くなっていた。場面の想起しやすさは、より具体的な場面を想像することと結びつき、その否定的な相互作用の責任や原因を明確に想像しやすくした可能性がある。そのため、どのような対処をすべきかが具体的に考えやすくなり、主張的行動の行使可能性が高くなったのであろう。一方、別れの理由になる可能性の高さや二者が対等ではないことは、その出来事が恋人との関係にとって重大な出来事であるという解釈を促し、関係改善のために主張的行動を行使しやすくしたのであろう。

Table 6　攻撃行動を目的変数にした階層線形モデルの結果

目的変数	攻撃行動の行使可能性				
			95%CI		
説明変数	*b*	*SE*	LL	UL	*p*
固定効果					
切片	1.63	0.16	1.33	1.94	.00
生起可能性	0.13	0.04	0.06	0.20	.00
想起しやすさ	-0.16	0.03	-0.22	-0.10	.00
二者の対等さ	-0.09	0.03	-0.15	-0.03	.01
別れの理由になる可能性	0.11	0.03	0.05	0.17	.00
神経症傾向	0.01	0.03	-0.05	0.07	.67
外向性	0.01	0.03	-0.04	0.06	.67
独占・束縛	0.10	0.02	0.05	0.14	.00
献身	-0.03	0.02	-0.08	0.01	.15
恋人の有無	-0.19	0.06	-0.30	-0.08	.00
性別	0.01	0.06	-0.10	0.13	.82
ランダム効果	分散				
切片	0.01				
残差	0.89				

主張的行動の行使可能性は、外向性が高いこと、恋愛は独占したり束縛したりするものと考えていることによって高くなっていた。外向性の高さと主張的行動の行使可能性が関連したことは、外向性が様々な社会的関係における主張性の高さと関連することを示した先行研究（e.g., Kammrath, McCarthy, Cortes, & Friesen, 2015）と整合する結果であった。また、恋愛を独占したり束縛したりするものとしてイメージしやすいことは、恋愛関係における不安の高さと関連する（金政, 2002）。さらに、恋愛関係への不安の高さは、他者との対立が生じた際の攻撃行動の多さと関連する（Downey, Freitas, Michealis, & Khouri, 1998）。そのため、攻撃的な態度を伴う自己主張行動が行使されやすい可能性がある。実際、後述するように、恋愛の独占・束縛イメージは、恋愛を攻撃行動の行使可能性の高さと関連していた。

受忍行動の行使可能性は、二者が対等であると感じること、別れの理由になる可能性が低いことによって高くなっていた。二者が対等であり、別れの理由になりにくい場面として、日常場面での些細だが過激な冗談や、二者の軽微な対立などが考えられる。このような些細な冗談や軽微な対立は、相手を

許すなど消極的な解決が図られることが多い（Finkel, Rusbult, Kumashiro, & Hannon, 2002）。加えて、些細な相互作用については、「言うまでもない」などの判断を下しやすいことも予測される。そのため、受忍行動が行使されやすくなる可能性がある。また、神経症傾向が高いことによって、受忍行動の行使可能性は高くなっていた。神経症傾向の高さは、親密な他者との対立時に消極的な行動を行使しやすいことや主張的行動を取りにくいことが先行研究において報告されており（e.g., Kurdek, 1997）、その結果と整合するものであった。

攻撃行動の行使可能性は、生起可能性が高いと感じること、別れの理由になる可能性が高いと感じること、場面が想起しにくいこと、二者が対等でないと感じることによって高くなっていた。これらの特徴のうち、別れの理由になる可能性が高いと感じることや二者が対等ではないことは、主張的行動の行使可能性を高める特徴と共通していた。一方、生起可能性が高いと感じることや場面が想起しにくいことは主張的行動の行使可能性を高める特徴にはなっておらず、これらの特徴が主張的行動の行使可能性が高まるか、攻撃的行動の行使可能性が高まるかの違いを生じさせている可能性がある。

また、攻撃行動の行使可能性は、恋愛を独占・束縛とイメージしやすいことによって高くなると同時に、恋愛を献身的に尽くすこととイメージすることによって低くなっていた。恋愛の独占・束縛イメージが攻撃行動の行使可能性を高めるのは、関係不安の高さと攻撃行動の多さの関連に起因すると推測される。一方、恋愛を献身的に尽くすこととイメージすることは、恋愛では相手のために自分を犠牲にしたり、相手のために何でもしたりするといった考え方に結びつくものである（金政, 2002）。したがって、献身イメージが高いことは、怒りを感じるような対立であっても、その怒りを我慢したり、相手に否があってもそれに目をつむったりすることと結びついてしまうと推測される。それゆえ、恋愛を献身的なものとイメージすることが、攻撃行動の行使可能性を低めたのであろう。

以上の結果を踏まえると、DaVに対する1次予防における場面設定について、2つのパターンを提案することができる。第1に、主張的行動と攻撃的行動のどちらを選択すべきかについて意思決定を行うような場面を設定するパターンである。上述した結果を見ると、主張的行動の行使可能性と攻撃的行動の行使可能性はどちらも、別れの理由になる可能性が高いことや二者が対等ではないという場面の特徴によって高められていた。したがって、これらの特徴を利用した場面を設定することで、主張的行動を行使できるか攻撃的行動を行使してしまうかのジレンマ状況を作り出すことができ、DaVへと激化する相互作用について深く考える展開を作り出せる可能性がある。第2に、受忍行動を行使しやすい場面を設定するパターンである。主張的な行動や攻撃的行動とは逆に、受忍行動は別れの理由になる可能性が低く、二者が対等であると感じるような場面の特徴によって行使可能性が高められていた。そのため、日常的に生じる可能性があり、かつ、DaVへと激化するような場面を設定することによって、主張的行動を行う難しさや主張的行動を行うための工夫を考えることができるであろう。

また、個人差については、恋愛のイメージが少なからず行動の行使可能性に影響していた。恋愛へのイメージを変容しようとする試みは須賀（2015）や相馬他（2016）でも行われており、一定の成果は得られている。場面を提示された際の行動行使の可能性と恋愛のイメージとが関連することを示した本研究の結果は、これらの試みの有効性を改めて示していると考えられよう。

本研究では、DaVに対する1次予防で用いる場面の特徴について検討した。本研究で作成した場面は、コミュニケーションスキルや対人スキルの育成も範疇とする教養教育において、DaVの一次予防を実践するための有用なツールとなりえるであろう。例えば、本研究で作成した場面を用いて親密な二者の相互作用や恋愛関係のあり方について議論する授業を展開することは、暴力を伴わない人間関係を構築することだけではなく、ジェンダーの問題や対人スキルの問題など、より広範なテーマへと発展する可能性がある。また、そのような実践の中で、本研究で作成した場面を改良していくことも期待される。

最後に、本研究の課題を述べる。本研究の課題は、場面提示の方法である。本研究では、テキストによる場面の提示を行った。しかし、最近では、映像によるDaV予防プログラム（西本・大沼・大久保,

2018）、Teen Choice（Levesque et al., 2016）のようなオンライン上のプログラムなど様々なメディアを用いたプログラムが展開されている。したがって、映像で場面を提示した際の場面の捉え方や行動行使の可能性、映像を用いることによるメリット・デメリットなども積極的に検討していくべきであろう。

引用文献

Arriaga, X. B. (2002). Joking violence among highly committed individuals. *Journal of Interpersonal Violence, 17*, 591–560. doi: 10.1177/0886260502017006001

Beydoun, H. A., Bdydoun, M. A., Kaufman, J. S., Lo, B., & Zonderman, A. B. (2012). Intimate partner violence against adult women and its association with major depressive disorder, depressive symptoms and postpartum depression: A systematic review and meta-analysis. *Social Science and Medicine, 75*, 959–975. doi: 10.1016/j.socscimed.2012.04.025

Collins, W. A., Welsh, D. P., & Furman, W. (2009). Adolescent Romantic Relationships. *Annual Review of Psychology, 50*, 631–652. doi: 10.1146/annurev.psych.60.110707.163459

Downey, G., Freitas, A. L., Michealis, B. & Khouri, H. (1998). The self-fulfilling prophecy in close relationships: Rejection sensitivity and rejection by romantic partners. *Journal of Personality and Social Psychology, 75*, 545–560.doi: 10.1037/0022–3514.75.2.545

Finkel, E. J., Rusbult, C. E., Kumashiro, M., & Hannon, P. A. (2002). Dealing with betrayal in close relationships: Does commitment promote forgiveness? *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 956–974.doi: 10.1037/0022–3514.82.6.956

Foshee, V. A., Reyes, L. M., Agnew-Brune, C. B., Simon, T. R., Vagi, K. J., Lee, R. D. & Suchindran, C. (2014). The effects of the evidence-based safe dates dating abuse prevention program on other youth violence outcomes. Prevention Science, *15*, 907–916. doi: 10.1007/s11121–014–0472–4

金政 祐司（2002）．恋愛のイメージ尺度の作成とその検討—親密な異性関係，成人の愛着スタイルとその関連から— 対人社会心理学，*2*，93–101.

Kammarth, L. K., McCarthy, M. H., Cortes, K., & Friesen, C. (2015). Picking one's battles: How assertiveness and unassertiveness abilities are associated with extraversion and agreeableness. *Social Psychological and Personality Science, 6*, 622–629. doi: 10.1177/1948550615572635

喜多 加実代・阪井 俊文（2015）．学校・大学におけるDV・デートDV予防教育の現状と課題—自治体の支援による推進可能性— 福岡教育大学紀要，*64,* 1–8.

Levesque, D. A., Johnson, J. L., Prochaska, J. M., & Paiva, A. L. (2016). Teen dating violence prevention: Cluster-randomized trial of Teen Choices, an online, stage-based program for healthy, nonviolent relationships. *Psychological Violence, 6*, 421–434.doi: 10.1037/vio0000049

Huang, F. L. (2018). Multilevel modeling myths. School Psychology Quarterly, *33*, 492–499. doi:10.1037/spq0000272

並川 努・谷 伊織・脇田 貴文・熊谷 龍一・中根 愛・野口 裕之（2012）．Big Five尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 心理学研究，*83*，91–99. doi: 10.4992/jjpsy.83.91

日本性教育協会（2019）．「若者の性」白書 第8回青少年の性行動全国調査報告 小学館

西本 佳代・大沼 泰枝・大久保 智生（2018）．大学におけるデートDV防止のための視覚教材の制作と教育効果の検討 香川大学教育研究，*15*，119–130.

O'Leary, K. D. & Slep, A. M. (2003). A dyadic longitudinal model of adolescent dating aggression. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology, 32*, 314–327. doi: 10.1207/S15374424JCCP3203_01

Rusbult, C. E., Verette, J., Whitney, Slovik, & Lipkus, I. (1991). Accommodation processes in close relationships: Theory and preliminary empirical evidence. Journal of Personality and Social Psychology, *60*, 53–78. doi:

10.1037/0022–3514.60.1.53
清水　裕士 (2014). 個人と集団のマルチレベル分析　ナカニシヤ出版
相馬　敏彦 (2016). “No”というコミュニケーションが防ぐのは暴力の生起か反復か？―非協調的志向性による暴力抑制効果がみられるタイミング―　日本社会心理学会第57回大会発表論文集
相馬　敏彦・浦　光博 (2010).「かけがえのなさ」に潜む陥穽：協調的志向性と非協調的志向性を通じた二つの影響プロセス　社会心理学研究, *49*, 1–16. doi: 10.14966/jssp.KJ00006813858
相馬　敏彦・杉山　詔二・古村　健太郎・山中　多民子・伊藤　言 (2020). DV一次予防プログラムの深化に向けて―当事者因子から対人環境因子への視点の拡張―　日工組社会安全財団2018年度一般研究助成報告書
相馬　敏彦・杉山　詔二・山中　多民子・門馬　乙魅・伊藤　言 (2016). 若者のDV被害を予防するプログラムの効果検証；DV被害の脆弱性モデルを基盤として　日工組社会安全財団2015年度一般研究助成研究報告書
須賀　朋子 (2015). 中学生へのドメスティック・バイオレンス予防啓発に関する研究　風間書房